

大学生の読書生活から見る読書推進の可能性

キムハニ*, 小山憲司**

*中央大学大学院文学研究科博士後期課程 **中央大学文学部

* a19.m53k@g.chuo-u.ac.jp ** koyama@tamacc.chuo-u.ac.jp

本研究の目的は、大学生の読書を推進するための方策を明らかにすることである。発表者は、2020年7月に中央大学の学部生を対象に読書実態アンケート調査を実施し、252名の回答を得た。本発表では、読書時間の多寡および授業における教員のアドバイスが大学生の読書教育に対する態度にどの程度関係しているかを分析した。その結果、大学生の読書教育に対する態度は、読書時間の多寡より、教員のアドバイスの有無やその多寡の方が関連していることが明らかとなった。

Survey of Reading Attitudes of College Students and Reading Promotion

Hani KIM*, Kenji KOYAMA**

* Doctoral Course, Graduate School of Letters, Chuo University

** Faculty of Letters, Chuo University

1. 研究の背景・目的

大学生の読書離れは、日本で長年指摘されてきた問題である。特に2017年に全国大学生生活協同組合連合会（以下、大学生協連）が実施した「学生生活実態調査」で、大学生の53.1%が1日の読書時間が「0分」であったという調査結果は、複数の新聞で取り上げられ話題を呼んだ。翌2018年の調査では48.0%と5.1ポイント減少したが、現在までその状況は続いている。最新の2020年調査では1日の読書時間の平均は32.1分、「0分」の学生は全体の47.2%であった[1]。

読書は、これまで蓄積されてきた過去の知識を獲得するほか、読み手の読解力、語彙力、思考力、想像力、表現力、共感力、自己認識等を向上させる等、様々なメリットがあると言われる[2](p.255)。そうしたメリットにも関わらず、大学生の読書離れは、改善の兆しがほとんど見えない状態である。

発表者は、大学生の不読問題の改善にあたり、授業に読書を取り入れるなど、大学の働きかけによる読書推進の可能性を検討している。そこで本研究では、大学生の読書時間と授業における教員

のアドバイスに着目し、読書教育に対する態度との関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

大学生の読書の実態を明らかにするため、中央大学の在籍生を対象にアンケート調査を行った。調査期間は2020年7月7日から7月31日とした。アンケート調査はGoogle Formで作成、実施した。共同研究者や他の教員の授業での案内のほか、SNSを用いてリンクを送り、回答を依頼した。回答者数は252名、有効回答者数は251名である。

質問項目は6セクション、合計34項目で構成される。このうち、本発表で扱う質問項目は、①1日の読書時間、②本の紹介やアドバイスがある授業の割合、③アドバイスに対する希望、④アドバイスの実際の読書への繋がり、⑤授業に読書を取り入れることに対する賛否、⑥⑤でそう考える理由の6つである。本研究では、①、②の2つの観点から、③、④の要素を分析し、その結果を基に、⑤、⑥を通じて読書推進の方向性を検討する。

3. 研究結果

3.1 大学生の読書実態：読書時間、読書習慣

3.1.1 1日の読書時間

1日の平均読書時間に関して7つの選択肢を用意し尋ねた結果、「全くしない」が47名(18.7%)、「30分未満」84名(33.5%)、「30分から1時間未満」71名(28.3%)、「1時間から2時間未満」37名(14.7%)、「2時間から3時間未満」6名(2.4%)、「3時間から4時間未満」3名(1.2%)、「4時間以上」3名(1.2%)であった。調査結果を踏まえ、本稿では読書時間が1時間以上の学生49名(19.5%)を1つのグループと見なし、4つのグループに分類した。すなわち、「全くしない」学生を「不読層」、「30分未満」を「少読層」、「30分から1時間未満」を「中読層」、「1時間以上」を「多読層」と名付け、分析した。

3.1.2 読書習慣

読書習慣を四択で尋ねた。その結果、「あるほう」が29名(11.6%)、「どちらかと言えばあるほう」が70名(27.9%)、「どちらかと言えない」が87名(34.7%)、「ない」が65名(25.9%)となった。

3.1.3 読書時間と読書習慣の関係

読書時間と読書習慣の2つに関連があるかを検定した結果、両者の間にはやや高い正の相関関係が認められた($r=0.475, p<.001$)。そこで本稿では、読書時間の多寡を用いて、授業における教員のアドバイス等との関係を分析することとする。

3.2 教員のアドバイスと大学生の読書態度

3.2.1 教員によるアドバイスの有無、希望、読書への繋がり

教員が本を紹介したり、読書方法などについてアドバイスしてくれたったりした授業があったかどうか、その割合を5つの選択肢で尋ねた。その結果、「なし」が41名(16.3%)、「4分の1程度」が101

名(40.2%)、「半分程度」が68名(27.1%)、「4分の3程度」が34名(13.5%)、「すべて」が7名(2.8%)となった。

また、教員によるアドバイスをどのように考えているかを尋ねたところ、「あまりいない」が30名(12.0%)、「今のままで十分だ」が128名(51.0%)、「少なく残念だ」が10名(4.0%)、「もっとしてほしい」が83名(33.1%)であった。

アドバイスがある授業に参加している学生210名に対し、そのアドバイスが実際の読書に繋がったかどうかを4つの選択肢で尋ねた。その結果、「つながった」が14名(5.6%)、「多少はつながった」が88名(35.1%)、「あまりつながらなかった」が64名(25.5%)、「つながらなかった」が35名(13.9%)となった(欠損値9名)。

3.2.2 教員によるアドバイスの有効性

(1) 読書時間とアドバイス希望

表1は、教員によるアドバイス希望の回答を1日の読書時間のグループごとに整理した結果である。なお、「少なく残念だ」と「もっとしてほしい」はほぼ同じ内容を指すことから合算した。その結果、多読層、中読層の約半数がアドバイスを希望しているのに対し、少読層、不読層の希望は2割から3割と少なかった。

表1：読書時間×アドバイス希望 (n=251)

希望 時間	あまりいらない	今のままで十分だ	少なく残念だ・ もっとしてほしい	n
不読	14.9%	61.7%	23.4%	47
少読	10.7%	58.3%	31.0%	84
中読	7.0%	46.5%	46.5%	71
多読	18.4%	34.7%	47.0%	49

($\chi^2=14.6, df=6, p<.05, r=0.129, p\text{値}=0.041$)

(2) アドバイスがある授業受講とアドバイス希望

次に、アドバイスがある授業の受講割合と、アドバイス希望の関係を確認した(表2)。なお、回答のうち「4分の3程度」と「すべて」が少なかったことから、これらをまとめて集計した。その

結果、その程度はともかくアドバイスのある授業を受けたことのある学生は、アドバイスの希望に関して大きな差は見えなかった。一方、そうした授業を受けたことのない学生の41.5%が「あまりいらない」と回答し、「今のままで十分だ」、すなわちアドバイスのない状況を肯定する意見12.2%と合わせると53.7%となった。

表 2：アドバイス授業の割合×アドバイス希望 (n=251)

希望 授業	あまりいらない	今のままで十分だ	少なくとも残念だ・もっとしてほしい	n
なし	41.5%	12.2%	46.3%	41
4分の1	7.9%	55.4%	36.7%	101
半分	5.9%	61.8%	32.4%	68
4分の3・すべて	2.4%	61.0%	36.6%	41

($\chi^2=52.7$, $df=6$, $p<.001$, $r=0.107$, p 値=.091)

(3) アドバイスがある授業受講と読書の繋がり

授業を受けて読書に繋がったかどうかを「つながった」「多少はつながった」「あまりつながらなかった」「つながらなかった」の4つから選んでもらったが、その結果を肯定的な前2者、否定的な後2者で集計し、1日の読書時間と関係性を分析した結果、両者の間に正の相関関係があった(表3)。

同様に、アドバイスがある授業の割合と読書との繋がりとの関係を確認した(表4)。アドバイスがある授業受講の割合が多いほど、肯定的な回答が多く、正の相関関係が推察される。

1日の読書時間およびアドバイスがある授業の割合が学生の読書に影響を与えるかをより明確に確認するため、多重線形回帰分析を実施した(表5)。分析の結果、 $Adj.R^2=0.121$ で12.1%と一応の説明力を持った。t値からみて、このモデルにおいて性別と学年は、学生の実際の読書への繋がりに有意な影響を与えていない。これに対し、性別と学年でコントロールした状態で、1日読書時間とアドバイスがある授業の割合は、それぞれ有意な影響を与えている。標準化係数 β は、1日読書時間 $\beta=.296$ 、アドバイスがある授業の割合 $\beta=.192$ で、いずれも1%水準で有意であり、読書へ

のつながりに影響力を持つことが示唆される。

表 3：読書時間×アドバイスの実際の読書への繋がり (n=201)

効果 時間	つながったほう	つながらなかったほう	n
不読	22.9%	77.1%	35
少読	47.0%	53.0%	68
中読	55.0%	45.0%	60
多読	76.3%	23.7%	38

($\chi^2=21.6$, $df=3$, $p<.001$, $r=0.320$, p 値<.001)

表 4：アドバイスがある授業の割合×アドバイスの実際の読書への繋がり (n=201)

効果 授業	つながったほう	つながらなかったほう	n
4分の1	38.2%	61.8%	97
半分	61.0%	39.0%	64
4分の3・すべて	65.0%	35.0%	40

($\chi^2=12.1$, $df=2$, $p<.01$, $r=0.230$, p 値=.001)

表 5：読書時間とアドバイスがある授業が実際の読書への繋がりに与える影響 (n=200)

変数	非標準化係数		標準化係数	t	p
	B	SE	β		
定数	.742	.191		3.897	<.001
性別	.031	.067	.031	.467	.641
学年	.002	.033	.004	.058	.953
読書時間	.150	.034	.296	4.403	<.001
アドバイス授業	.124	.044	.192	2.832	.005

3.3 読書教育と大学生の読書態度

授業の中に読書を積極的に取り入れることについての賛否を尋ねたところ、最も多かったのが「賛成」で138名(55.0%)であった。続いて「どちらとも言えない」が69名(27.5%)、「反対」が44名(17.5%)であった。

学生の1日の読書時間から見ると、全てのグループで約半数、もしくはそれ以上が賛成していた(表6)。このことから、読書教育の賛否と学生の

読書時間との間には関係はないと考えられる。

その反面、アドバイスがある授業受講が多いほど、読書授業に賛成する人の割合が多く、両者は正の相関関係が見える（表 7）。授業で読書に関わる学習を経験している学生ほど、それを受け入れる心理的障壁が低いように思われる。

表 6：読書時間×授業への読書の取り入れの賛否 (n=251)

読書授業 時間	賛成	どちらとも 言えない	反対	n
不読	48.9%	36.2%	14.9%	47
少読	59.5%	21.4%	19.0%	84
中読	53.5%	26.8%	19.7%	71
多読	55.1%	30.6%	14.3%	49

($\chi^2=4.0$, $df=6$, $p=n.s.$, $r=0.012$, p 値=.851)

表 7：アドバイスがある授業受講×授業への読書の取り入れの賛否 (n=251)

読書授業 授業	賛成	どちらとも 言えない	反対	n
なし	48.8%	24.4%	26.8%	41
4分の1	50.5%	28.7%	20.8%	101
半分	55.9%	26.8%	19.7%	68
4分の3・ すべて	70.7%	26.8%	2.4%	41

($\chi^2=10.8$, $df=6$, $p<.01$, $r=0.182$, p 値=.004)

表 8：読書を取り入れた授業の賛成の理由×読書時間 (n=138)

賛成理由 時間	読書の 長所のため	強制的に 読むように なる	紹介して もらえる	他人の考えが わかる	楽しそう だから	n
不読	30.4%	52.2%	8.7%	13.0%	4.3%	23
少読	36.0%	44.0%	16.0%	2.0%	6.0%	50
中読	26.3%	47.4%	15.8%	5.3%	10.5%	38
多読	14.8%	22.2%	18.5%	40.7%	0.0%	27

読書を取り入れる授業に賛成する理由を自由記述式（複数理由の回答者有り）で尋ねた結果をまとめたのが、表 8 である。その結果、不読層、少読層、中読層で最も多く寄せられた意見は「強制的に読むようになる」といった意見であった。不読層や少読層でも、外部からの何らかの刺激、あるいは例えそれが強制的であるとしても実際に読書する機会を求めていることが推測される。

4. 考察

本調査では、①読書時間の多寡および②授業における教員のアドバイスの有無の 2 つの観点から、大学生の読書教育に対する態度（アドバイスの希望度、実際の読書への繋がり、読書授業に対する賛否）とどの程度関係しているかを分析した。

その結果、教員のアドバイスへの希望は、①とも、②とも、明確ではないが、関係があることを見て取れた。また、教員のアドバイスが実際の読書に繋がったかどうかに対しては、①と②の両方とも正の相関関係をもち、その中でも①がより大きい影響力を持つことが確認できた。授業の中に読書を積極的に取り入れることについての賛否は、①とは相関関係がなく、②と関係があった。

①の観点からは、不読層は読書授業に必ずしも否定的ではないこと、不読層を含め、読書授業に賛成する大多数は多少強制性が加わるとしても読書する機会を求めているということが確認された。また、②の観点からは、アドバイスがある授業の受講割合はアドバイスの希望にも、また読書に繋がるかどうかにも関与していることが示唆された。

本調査研究は、読書時間が多い学生だけでなく、ゼロあるいは少ない学生でも、大学が提供する教育環境によって読書を推進できる可能性を示唆する。その環境は、読書に対する刺激を十分に与えたり、強制性があるとしても学生のレベルや好みに配慮した授業を行ったりすることが考えられる。

注・文献

[1] “第 56 回学生生活実態調査の概要報告”. 全国大学生生活協同組合連合会. 2021-3-8.

<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>, (参照 2021-10-3).

[2] Sievert, K. et al. Library, library, make me a match: Impact of form-based readers' advisory on academic library use and student leisure reading. Reference and User Services Quarterly. American Library Association. 2018, 57(4), p. 254-65.